

幽居即事（石川丈山）  
ゆうきよそくじ いしかわじょうざん

山氣 人世に 殊なり  
さんき じんせい こと

常に 含む 太古の 情  
つね ふく たいこ じょう

四時 雲樹の 色  
しいじ うんじゆ いろ

一曲 澗泉の 声  
いつきよく かんせん こえ

雨は 鶯衣を 湿して 重く  
あめ おうい うるお おも

風は 蝶袖を 喧めて 軽し  
かせ ちようしゆう あたた かる

詩を 為り 老に 至ると 雖も  
し づく ろう いた いえど

未だ 鬼神をして 驚かしめず  
いま きしん おどろ

山氣殊人世 常含太古情

四時雲樹色 一曲澗泉聲

雨濕鶯衣重 風喧蝶袖輕

爲詩雖至老 未使鬼神驚

解説 春の暖かい日ざしの中で、即興的に賦された詩。

語釈 ※幽居Ⅱ世塵をさけて静かな所に住む。※即時Ⅱその時と場所のことを詠ずること。※山氣Ⅱ山間の風氣。山は比叡山。※人世Ⅱ俗世界。世の中。※太古情Ⅱ俗塵にけがれない昔ながらの風情。※四時Ⅱ春夏秋冬の四季。※雲樹色Ⅱ雲と樹木の色。大自然の風景。※一曲Ⅱ音楽の一節。ただ聞こえるのは澗泉の声だけだからいう。※澗泉Ⅱ谷間からわき出る泉。※雨湿Ⅱ雨で湿り気を含む。※鶯衣重Ⅱ雨を含んだ鶯の衣（羽）が重い。※風喧Ⅱ春の風は暖かく。※蝶袖軽Ⅱ蝶の衣（羽）が軽やかである。※為詩雖至老Ⅱ詩を作つて老境に至つたといえども。詩仙堂に籠もつて作詩してはいるが、過去の詩作をふり返つてみるとの意。※未使鬼神驚Ⅱ鬼神の心を感じさせるまでの詩作がないことをいう。

通釈 山間の風氣は俗世間とちがつて、いつも太古そのままの自然の風情をたたえている。四季を通じての雲のたたずまいや樹木の色あいの中に、聞こえてくる音楽といえは谷のわき水の静寂な声ばかりである。春雨は鶯の羽をしつとりと湿して重くし、暖かい風はかえつたばかりのやわらかい蝶の羽を温めて軽やかである。ふつとゆきにし日をふりかえつてみると、詩を作り出して久しくなるが、老年に至つても、まだ鬼神の心を感じさせるほどの詩が出来ない。